**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第４４回　（２０１８年５月８日）**

**・第４４回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」１６頁～１９頁**

・📖 （読む）「師と弟子」１６頁下段Ｌ２～Ⅼ１６

*集まりが終わると、信者たちはをそぞろ歩いた。Mはパンチャヴァテの方角に行った。午後五時ごろだった。しばらくして、彼は師の部屋に戻った。そこで、北側の小さなベランダに、驚くべき光景を目撃した。*

*シュリー・ラーマクリシュナは数名の信者に囲まれてじっと立っておられ、ナレーンドラがうたっていたのだ。Mは、師以外の人がこんなに美しくうたうのをまだきいたことがなかった。シュリー・ラーマクリシュナを見たとき、彼は驚異の念に打たれた。目は釘づけされ、不動の姿で立っておられたのである。彼は呼吸もしておられないように見えた。一信者が、彼はサマーデに入っておられるのだ、とMに言った。Mは、このようなものをかつて見たこともきいたこともなかった。驚きに言葉を忘れて、彼は思った、「人が神を意識して、これほどに外界を忘れ去ることがありえるのか。このような状態を引き起こす彼の信仰と帰依は、どんなにか深いものに違いない！」*

（解説）

**＜サマーディ＞**

Mさんは初めてシュリー・ラーマクリシュナがサマーディに入っているのを見ました。

Mさんはとてもびっくりしました。Mさんはそこまで聖典の勉強をしていなかったので、なにが起こっているのかわかりませんでしたから。

サマーディは、『ラーマクリシュナの福音』を勉強したことがある人にとっては、なじみがあることです。なぜなら、『福音』の中にはサマーディが何回も出てくるからです。しかし、それは自分の体験ではないし、サマーディに入っている人を実際に見たこともないですね。サマーディは大変珍しいので、歴史的にもその経験のある人は少ないです。だから当然、サマーディを見たことがある人はとても少ないです。ふつうの人は何がサマーディか、見たことがないのでわかりませんね。ですので、誤解される可能性もあります。ヒステリーや、てんかんでも意識がなくなることがあるので、シュリー・ラーマクリシュナを病気だと思う人もいました。例えば、ブラフモー・サマージの説法者シヴァナート・シャーストリーは、「師のあの状態は、ヒステリーや、てんかんに似た症状だ」と言って、サマーディであることを信じていませんでした。なぜならサマーディのことを知りませんでしたから。

☞（「ラーマクリシュナの生涯」123頁L19~124頁L8参照）

**スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ初めてシュリー・ラーマクリシュナのサマーディを知る**

19世紀のコルカタは、イギリス統治下のインドの首都でした。当時のコルカタは西洋のことをたくさん勉強した、モダンな人がたくさんいました。もちろん伝統的なヒンドゥ教の信者や、聖者もいました。しかし、サマーディは当時も特別で、ほとんどの人はそのことを知りませんでした。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが初めて、「ドッキネッショルのシュリー・ラーマクリシュナがサマーディに入る」、ということを聞いたのは、スコティッシュ・チャーチ・カレッジの西洋人の先生であり、牧師のウィリアム・ヘイスティからでした。彼はワーズワースの詩（excursion）についての講義をしていました。ワーズワースは自然のなかで、自分と自然とが一つになる、エクスタシーの体験を詩にしたのです。ウィリアム・ヘイスティは「私は、このような状態に入った人を一人だけ見たことがあります。それはドッキネッショルのシュリー・ラーマクリシュナです」と言いました。☞（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯38頁L8~12参照）

ワーズワースは自然と一つになりましたが、シュリー・ラーマクリシュナは、神様と自分が一つになるのでしたね。その講義を聞いたスワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、その時、そのことについてあまり興味がなかったので、聞き流しました。

**聖典の中のサマーディ**

サマーディはヒンドゥ教の聖典の中にあります。

パタンジャリのヨーガ・スートラでは、ニルヴィジャ・サマーディ,サヴィジャ・サマーデｨ

ヴェーダーンタ・サーラでは、ニルヴィカルパ・サマーディ、サヴィカルパ・サマーディ

ヴィシュヌ派の聖典の中には、バーヴァ・サマーディ

などがあります。　　☞（『福音』第二版の出版とことばと序文（9）参照）

　　　　　　　　　　☞（第3回『福音』勉強会テキストデータ参照）

では、サマーディとはどのような状態のことをいうのでしょうか？　サマーディに入った人の特徴を説明します。

**サマーディの状態**

肉体的なバイブレーションがない

無意識

まばたきしない

目は開いていても何も見ていない

呼吸をしていない

脈がない

これらの状態がサマーディの状態ですが、呼吸をせず、脈がなくても、病気ではありません。シュリー・ラーマクリシュナはとても元気でした。

**シュリー・ラーマクリシュナの状態がサマーディと分かった経緯**

◎バイラヴィー・ブラーフマニーという、シュリー・ラーマクリシュナにタントラを教えた女性が、「あなたのその状態は、シュリー・チャイタンニャと同じサマーディの状態です」と言いました。　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『ラーマクリシュナの生涯』224頁参照）

◎トター・プリーというシュリー・ラーマクリシュにヴェーダーンタを教えた方も、サマーディの経験がありました。彼はシュリー・ラーマクリシュナが三日間ずっとサマーディに入ったのを見てとても驚きました。　　☞（『ラーマクリシュナの生涯』306頁L1~307頁L16参照）

たぶん、そのころから、ドッキネッショル寺院のスタッフや周りの人がシュリー・ラーマクリシュナのサマーディについて知り始めたかもしれないです。

◎シュリー・ラーマクリシュナ本人が、自分の状態について、周りに話をしていました。「私がもしその状態に入ったら、あるマントラを唱えてください。そうするとその状態から戻ることができます」と言いました。

◎ずっとあとにスワーミー・ヴィヴェーカーナンダがニルヴィカルパ・サマーディに入り、シュリー・ラーマクリシュナの状態を理解することができました。

これらの理由でシュリー・ラーマクリシュナのサマーディのことがだんだんと人びとに知られるようになりました。

Mさんは、ある人から目の前で起こっている状態がサマーディだと聞いたのですね。Mさんはサマーディを見て、言葉を忘れるくらいびっくりしましたね。いったい、どれくらい神様のことを考えて、どれくらい神様を愛して、ふつうの意識がなくなるのか、Mさんには想像もできない。もちろん、ふつうの信仰、神様の考え、神様に対する愛では、サマーディには至らないですから。

・📖 （読む）「師と弟子」１６頁下段Ｌ１７～１７頁下段Ⅼ８

*ナレーンドラはうたっていた。*

*おおわが心よ、ハリを瞑想せよ、*

*けがれなき者、あくまで純粋な魂を。*

*の内に輝く光の、なんと比類のないこと。*

*妙なるの御姿の、なんと魂を魅すること。*

*信者たちのすべてにとって、彼は*

*なんと懐かしいお方か。*

*みずみずしく花開く愛にひときわ美しく、*

*百万の月の輝きをも恥じ入らせるばかりに、*

*の御姿の栄光は稲妻のごとく輝き、*

*真の喜びに髪を逆立たしめる。*

*この最後の行がうたわれたとき、師は身をふるわせられた。彼の髪は逆立ち、歓喜の涙はほおを伝って流れ落ちた。ときどき、その唇は微笑に開かれた。「百万の月の輝きをも恥じ入らせるばかり」の神の比類のない美しさを見ておられたのだろうか。これが神の、霊のエッセンスの、ヴィジョンだったのだろうか。このようなヴィジョンを得るためにはどんなにか多くの苦行と修行、またどんなにか深い信仰と帰依が必要であったに違いない。*

*歌はつづいた―*

*汝のハートの蓮華の中に、のをまつれ。*

*らかな心と、神聖な愛に輝く目とをもって、*

*あの無比の御姿を礼拝せよ。*

*ふたたびあの心を魅する微笑、身体は相変わらず不動、目は不可思議な内なるヴィジョンを見つめるかのように半ば閉じられて。*

*歌は終わりに近づき、ナレーンドラは最後の数行をうたった。*

*への愛の法悦の魔力に捕らえられて、*

*みずからを永遠に沈めよ、おお心よ、*

*純粋至福なる彼の中に。*

*彼が目撃したサマーディと神の至福の光景は、Mの心に消しがたい印象を与えた。彼は深く感動して家に帰った。ときどき、自分の内部に、彼はあの、魂を酔わせる歌のこだまをきいた。*

*みずからを永遠に沈めよ、おお心よ、*

*純粋知識、純粋至福なるの中に。*

（解説）

Mさんの描写力はすごいです。同じものを見てもそのように描写はできないですね。まるで詩人のようです。それが『福音』の特徴です。

ときどき、好きな歌を聞いて、心の中でそのワンフレーズを口ずさむことがありますね。それとおなじようにMさんの内部で歌がこだましました。この歌のメッセージは、「みずからを永遠に沈めよ、おお心よ、　純粋知識、純粋至福なるの中に」です。

・📖 （読む）「師と弟子」１7頁下段Ｌ9~Ⅼ1８

翌日もまた、Mにとっては休日だった。午後三時に、彼はドッキネッショルに着いた。シュリー・ラーマクリシュナは自室においでになり、ナレーンドラ、バーヴァナート、および他の数名の信者たちが、床にひろげられたござの上にすわっていた。全部、一九歳から二〇歳の若者だった。小さいほうの寝台の上にすわって、シュリー・ラーマクリシュナは彼らとともに語り、微笑しておられた。

　Mが部屋に入るやいなや、師は大声で笑い、男の子たちにおっしゃった、「そら！　また彼が来たよ」一同もともに笑った。Mは彼の前に低く頭を下げ、そして席をとった。これまで彼は、イギリス風の教育を受けた者たちがするように、手を合わせてあいさつをしていた。しかしその日、彼は、正統派ヒンドゥの風習にしたがって師の足下にひれ伏すことを学んだ。

(解説)

これがヒンドゥ教のプラナームのやり方です。

・📖 （読む）「師と弟子」１８頁上段Ｌ１～Ⅼ９

*間もなく師は、彼が笑われたわけを信者たちにお話になった。*

*師はおっしゃった、「ある男が午後四時に一羽のクジャクにアヘンの一粒を与えた。*

*翌日、きっちり同じ時刻に、クジャクはまたやって来た。薬の酔い心地をおぼえて、もう一服もらおうと間に合うようにやって来たのだ」（みな笑う）*

*Mはこれを、非常に適切な説明だと思った。**家にいてさえ、彼は一瞬間もシュリー・ラーマクリシュナへの思いを追い払うことができなかったのだ。彼の心は絶えずドッキネッショルにあり、ふたたび出かけるまで、あと何分と時を数えていたのである。*

（解説）

Mさんは笑われた理由を自分で説明しました。

クジャクはアヘン中毒のようになりました。

ベンガル語の原語に比べてとてもシンプルな部分があります。なぜなら英語版がとてもシンプルになっていて、そこから日本語に翻訳しているからです。ベンガル語ではどのように書かれているかを説明します。

**英語から日本語　（日本語版『福音』訳）**

*「家にいてさえ、彼は一瞬間もシュリー・ラーマクリシュナへの思いを追い払うことができなかったのだ。彼の心は絶えずドッキネッショルにあり、ふたたび出かけるまで、あと何分と時を数えていたのである」*

　　　　↓　　　　　↓　　　　↓

**ベンガル語原典から日本語**

*家に帰っても、私はそちらに惹きつけられています。*

*昼も夜も、私の心はそちらに惹きつけられています。*

*誰が私を惹きつけているのでしょうか。*

*次はいつお会いできるだろうか、いつご挨拶できるだろうか。*

*別の場所に行く用事があっても、私は絶対にそちらに行かなければならないのです。*

**惹きつけられる**

Mさんはそれくらい強く惹きつけられました。みなさんもその経験がありませんか。例えば恋に落ちたときには、好きな人に次はいつ会えるか、仕事中でも考えますね。好きな人に惹きつけられているからです。でも、結婚したあとは、そうではなくなりますが。（笑）

Mさんはシュリー・ラーマクリシュナに会いに行きたいというのではなく、会いに行かねばならない、というほどの強い感覚です。それくらい惹きつけられていました。

恋人に惹きつけられるのと、神様に惹きつけられるのではどう違うでしょうか。

どちらも「愛」が原因ですがありますが、何が違いますか？

**世俗的な愛に惹きつけられる**

ふつうの世俗的な愛の場合、強い憧れはだんだんとなくなります。そして世俗的な愛については、執着が出ます。その結果、束縛、苦しみ、悲しみ、失望がでますね。

**神様に惹きつけられる**

しかし、神様への愛の場合、その愛はだんだんと深まるばかりです。そして神様への愛については執着とは言いません。

ラーダーとクリシュナを思い浮かべてください。クリシュナという偉大な魂が、ラーダーという個人的な魂を惹きつけていますね。神が信者を惹きつけます。

ラーダーと、ゴーピーたちは、クリシュナの笛の音色を聞いて、家族や用事を置き去りにして、クリシュナのものへと行きました。それくらいクリシュナは信者を惹きつけました。

**偉大な魂は大きな磁石、個人的な魂は鉄**

鉄はどんなに別の方向に行きたくても、どうしても大きな磁石に自然と引きつけらますね。

神様と信者も同じです。信者は別のところに行きたくても、神様のところに行ってしまうのです。

しかし、神様に惹きつけられない人もいますね。その人の心（鉄）には不純（土）がたくさんついているので、惹きつけられないのです。シュリー・ラーマクリシュナに会ったことがある人でも、惹きつけられなかった人もいますね。ふつうの人には、執着や欲望など、さまざまな土が鉄のまわりについています。それを、いろいろ実践し、後悔の涙で土を洗い流して、心が純粋になりますと、すぐに神様に惹きつけられるようになります。

Mさんがすぐにシュリー・ラーマクリシュナに惹きつけられたのは、Mさんの心はもともと純粋で、神様がとても好きだったからです。Mさんだけでなく他の直弟子の方たちもそうでした。そして、シュリー・ラーマクリシュナだけではなく、スワーミージーやブラフマーナンダジも信者を惹きつけていました。

**聖者が信者を惹きつける例（ブラフマーナンダジと3人の信者）**

ブラフマーナンダジの弟子が3人、コルカタの別々の場所にいました。彼らはなぜか、急にブラフマーナンダジに会いたい、会いに行かなければならいと思いました。夜も更けて10時ころでしたが、3人は別々にベルル・マトへ向かう船の船着き場に向かい、そこでばったりと合いました。それから3人は船に乗ってベルル・マトに着きました。ブラフマーナンダジは、3人の顔を見ると、「向こうに食事の用意ができているので食べてください」と言いました。ブラフマーナンダジが3人を惹きつけていたので、3人が来ることをすでに知っていたのですね。

・📖 （読む）「師と弟子」１８頁上段Ｌ１０～L１９

*一方では、師は男の子たちをもっともうち解けた友だちのように扱い、彼らと大はしゃぎにはしゃいでおられた。腹を抱かえる爆笑のとどろきが部屋に満ちた。まるで喜びの市のようであった。いっさいが、Mにとっては驚くべき新事実だった。彼は思った、「私はきのう、神に酔った彼を見たばかりではないか。あのとき彼は、神の愛の海を泳いでおられたのではなかったか―私がかつて見たことのない光景であった。そしてきょうは、その同じ人がごくふつうの人間のようにふるまっておられる。私がはじめてここに来た日に小言をおっしゃったのは彼ではなかったのか。彼が、『そしてお前は知識の人だと言うのか』と言って私を戒められたのではなかったか。*

（解説）

**シュリー・ラーマクリシュナはさまざまな性格、正反対の性格を合わせ持つ**

Mさんはシュリー・ラーマクリシュナの性格について混乱が出ました。これまでに見たシュリー・ラーマクリシュナは、とてもとても神聖で、知識がいっぱい、サマーディにまで入っておられた。それが、次には、冗談という世俗的な楽しみで、若者たちと楽しんでいる。それは矛盾ではないですか？

ふつう、一人の人の性格は、シリアスな性格の人は、ずっとシリアスであまり冗談を言わない、冗談が好きな人はあまりシリアスにはならない、どちらかですね。バクタとギャーニーも正反対です。

・バクタは、神様が好きで、神様の名まえを聞くと涙が出る、礼拝、儀式が好き、賛歌が好き、神様を飾ります。

・ギャーニーは形のある神様は全然好きではない、いつもブラフマンとマーヤーを識別している、感情が全然ない。正反対ですね。

おろか⇔賢い、バクタ⇔ギャーニー、狂った人⇔ふつうの人、男性⇔女性、など、正反対の性質が同じ人の中にあることはほとんどないですね。しかし、それができる人がシュリー・ラーマクリシュナです。

例えば、シュリー・ラーマクリシュナは男性でしたが、あるときは、女性の性格になって、女性の飾りをつけ、女性の服を身にまとっていたので、モトゥル・バーブはその女性がシュリー・ラーマクリシュナだと気が付かなかったほどです。

ココノプルシャ　ココノプラクリティ♫　（あるときはプルシャ、あるときはプラクリティ）

という歌詞がマーキアマーカローという歌の中にありますね。　☞(CD　DivyaGiti２track12)

シュリー・ラーマクリシュナはすべてのの性格を持ち合わせていました。それはとても特別です。

海や空は他のものに例えようがないように、シュリー・ラーマクリシュナはシュリー・ラーマクリシュナ以外のものと比べることができません。それくらい特別です。

そのように、同じ人の中にいろんなタイプが入っているのは、確かに混乱もありますが、とても面白いですね。

シュリー・ラーマクリシュナはまったく単調ではなかった。しかしそれには困ったこともありました。すぐに性格が変わるので、一緒に住むのはとても難しかったです。いつ、ギャーニーのムードになるか、いつシリアスになるか、浅い状態になるか、わからないですから。

**シュリー・ラーマクリシュナはエゴが全くない**

そのころのシュリー・ラーマクリシュナは46歳くらいでした。その人が、年が倍以上離れた若者と笑い転げるのです。シュリー・ラーマクリシュナは高い高い霊的なレベルの人なのに、そのことを全部を忘れて、皆さんと同じレベルまで下がって、冗談を言い合っていました。それはどういうことでしょうか？

**シュリー・ラーマクリシュナには、エゴ、自分という意識、が全然なかった**ので、それができました。ふつうみなさんは、

・私の名前は○○です　・私はヒンドゥ教徒です　・私はインド人です　・私は○○の仕事をしています

・私は○○が好きです　・私は○○を勉強しました、・私はお金をたくさん持っています

など、自分についての意識をたくさん持っていますね。その種類の意識をもっているあいだは、ほかの人とレベルを合わせることはできないです。しかし、シュリー・ラーマクリシュナは、

「**すべてはマザー・カーリーがご案内してくださいます、状態をつくっておられます。私には何もない、何も知らない**」と言っています。その意味は、**自分の意識は、自分の人格について意識がない**、という意味です。なぜなら**エゴが全くありません**から。

アヴァターラ（神の化身）のしるしのひとつは、すべての対の性質、両極端なものを両方持っているということです。それがパラマハンサの状態です。

**シュリー・ラーマクリシュナの姿を見ることで、至福のイメージがわき、宗教を楽しいものだと感じられる**

神の本性は、サット・チット・アーナンダです。

皆さんは神様のことを考えたときに、サット（完全なる存在）と、チット（完全なる知識、意識）については、イメージすることができても、アーナンダ（完全なる至福）についてのイメージはなかなか難しいかもしれない。

ふつうの人が宗教を遠ざける理由に、宗教のイメージがあります。厳しい、ドライ、シリアス、鈍い、そして、楽しみをすべて放棄しないといけない、などすべて否定的なイメージがあります。

しかし、『福音』の中のシュリー・ラーマクリシュナを見てください。いつも楽しみ、楽しみ、楽しみ、でしょ。宗教を実践し、霊的にとても高いレベルの方が、実際にはいつも楽しんでおられる。その姿からわれわれは神様のアーナンダ（完全なる至福）のイメージが想像できるのではないでしょうか。そして、われわれはシュリー・ラーマクリシュナの写真を見るだけでも、どれくらい深い至福の中にいるか、ということが想像できますね。

そうです。**本当の宗教には、大きな至福があります**。世俗的な楽しみとは比べ物にならないくらいの至福です。神様は面白いのです。

**神の楽しみは、海のように限りがなく無限です。それに比べて世俗的な楽しみは、井戸ほどの大きさ**です。

・📖 （読む）「師と弟子」１８頁上段Ｌ２０～下段L７

*形のある神も形のない神と同じように本物である、と私におっしゃったのは、彼ではなかったのか。彼は私に、神のみが実在、他はすべて幻であるとお話になったのではなかったか。金持ちの家のお手伝いのように、無執着の心で世間に暮らせと私に助言なさったのは彼ではなかったのか」*

*シュリー・ラーマクリシュナは若い信者たちとともに大いに楽しんでいらっしゃった。ときどき、彼らはちらっとMのほうに目をおやりになった。彼は、Mが黙って座っているのをごらんになった。師はラムラルにおっしゃった、「ね、彼は少しばかり年上だ。それだからいくぶんかまじめなのだよ。若い連中がふざけているのに、彼は黙ってすわっている」と。Mは二八歳くらいだった。*

（解説）

Mさんはちょっとシリアスなタイプでした。シリアスでしたが、すべてを包み隠さず『福音』に書きました。ときどきシリアスな人は、自分の気に入った部分だけを日記に書く傾向がありますが、Mさんの特徴はすべてを書いたことです。Mさんは学校の先生でしたので、シリアスでした。そしてそのシリアスさをみてシュリー・ラーマクリシュナは若者に冗談を言いました。

・📖 （読む）「師と弟子」１８頁下段Ｌ７～Ⅼ１５

*会話はハヌマーンのことにおよんだ。彼の絵が、師の部屋にかかっているのだ。*

*シュリー・ラーマクリシュナはおっしゃった、「ハヌマーンの心境をまあ想像してごらん。彼は金にも、名誉にも、衣食にも、他の何ものにも頓着しなかった。神だけを求めていたのだ。彼が水晶の柱の中に隠してあった天上の武器を持って逃げようとしたとき、マンドダは彼を下りてこさせ、武器を落とさせようとさまざまの果物を見せて誘惑しはじめた。*

（解説）

マンドダリとは、ラーマーヤナ叙事詩のラーヴァナの奥さんです。

・📖 （読む）「師と弟子」１８頁下段Ｌ１５～１９頁上段Ⅼ９

しかし、彼はそうやすやすとあざむかれはしなかった（注）。彼女の誘いに答えて、この歌をうたったのだ。

　　　私に果物が必要か。私はこの人生を

　　　ほんとうに実り豊かにする、果物を持っている。

　　　私のハートの内に、ラーマの木が生えていて、

　　　その果実として救いを実らせる。

　　　ラーマという願望成就の木の下に、

　　　私はくつろいですわり、なんでもほしい果実を摘む。

　　　しかしもしあなたが果実をうんぬんするなら―

　　　私は普通の果実のではないぞ。

　　　見よ、私は行く、あなたに苦い果実を残して。

　シュリー・ラーマクリシュナは、歌をうたいつつサマーディにお入りになった。ふたたび、彼の写真に見られる、あの半ば閉じられた目と不動の。まさに一分前に、信者たちは彼とともに笑い興じていた。いまは、すべての目が彼に釘づけされた。こうして、二回、Mはサマーディに入られた師を見た。

（解説）

Mさんは、またサマーディを見ましたね（笑）　シュリー・ラーマクリシュナは、一瞬前には笑っていたと思ったら、すぐに次の変化が起こりました。ふつうの人はそんなに早く変化することは難しいですね。シュリー・ラーマクリシュナの変化は予測不可能でした。

**シュリー・ラーマクリシュナは少しの気配でも神様を思い出す（神様と一つになる）**

シュリー・ラーマクリシュナは、いつもほんとにちょっとした気配で神様のことを思い出しました。この場合の思い出すという言葉の意味は、神様と一つになる、つまりサマーディということです。

**・シュリー・ラーマクリシュナが神様を思い出した例**

◎シュリー・ラーマクリシュナは、あるイギリス人の息子を見て、サマーディに入りました。なぜなら、その息子がクリシュナが笛を吹く時のように、一本の足をもう片方の足に絡めて立っていたからです。

◎シュリー・ラーマクリシュナは、青い服を着た売春婦を見て、サマーディに入りました。なぜなら、シーターのことを思い出したからです。

**シュリー・ラーマクリシュナはいつも心を神様に向けていた**

シュリー・ラーマクリシュナは、純粋なものを見たときだけでなく、不純なものを見ても、神様を思い出してサマーディに入りました。ときどき食事中に神様のことを思い出して、食事ができないこともありました。

シュリー・ラーマクリシュナの心は方位磁石の磁針のようでした。磁針は何があっても真北を指しているように、シュリー・ラーマクリシュナの心はいつも何があってもいつも神様の方を向いているのでした。

シュリー・ラーマクリシュナのレベルは一番上のチャクラ、サハスラーラにいつもありました。そこからときどき、私たちを導くために、のどまで下りてきたのです。もし、いつも神様とひとつの状態のままでいると、シュリー・ラーマクリシュナは、人間として生まれてきた意味がなくなりますでしょ。人間として生まれた目的は人々を導くことですから。マザー・カーリーがわれわれのために、シュリー・ラーマクリシュナを惹きつけて、のどまで意識をおろしてシュリー・ラーマクリシュナに話をさせていたのです。

ホーリー・マザーもサマーディに入りましたが、シュリー・ラーマクリシュナと違う点は、ホーリー・マザーは自分がサマーディに入っているということを隠すことができたことです。ホーリー・マザーのパワーはもっともっと強かったのです。

トゥリヤーナンダジが言いました、「われわれは心をのどのチャクラから上に上げるのにはとても努力が必要です。しかし、ホーリー・マザーはわれわれのために、強引に、上からのどまで引き下ろしていたのです」と。

生徒「いかに慈悲深いかって感じますね」

慈悲深い。慈悲深さから、われわれを導いてくださいます。

（第44回『福音』勉強会）以上